

異文化と「勘違い」

——いま、中国を講ずることについて——¹⁾

好並 晶*

Cross-cultural misunderstanding ; About a lecturing on China

Akira YOSHINAMI

Teaching cross-culture should be started with the idea that learning about foreign culture is not the same as learning domestic culture. We have to realize it from what happens in our daily lives around us. This article illustrates misunderstanding about China and Chinese in terms of Confucius' words, the habit of gift giving, the importance of eating, and Chinese poetry.

Key words: ① misunderstanding ② Chinese classics ③ gift as an etiquette ④ eating in films

1. 序言：“異”なる文化はすぐ傍にある

「異文化理解」の教育実践は、先ず他国の文化が自国の文化と「異なる」という事実を知ることから始められなければなるまい。それを出来る限り身近な現象から捉え、「はたと気付く」ファクターを手掛かりとする必要がある。 “異”なる文化はすぐ傍にあるのだ。

マイケル・ジャクソンがその名を世界的なものにしたヒット曲“Beat It”は、1980年代ポップスに浸っていた世代からすれば、イントロを聴くだけであの“Beat”感を胸に甦らせるだろう。プロモーションビデオは、怪しげな夜のダウンタウンでナイフ片手に決闘をしかける若者たち、そしてキレの良いマイケルのダンスで構成され、若者の暴力的な血の滾りを感じさせる。この曲の邦題は「今夜はビート・イット」。こうなると“Beat”を「殴る」「叩きつける」の意味ととるのが自然であろう。だが、歌詞を

訳せばその正反対の意味であることが一目瞭然となる。

You better run, You better do what you can

Don't wanna see no blood, Don't be a macho man

(略) So beat it, But you wanna be bad, Just beat it, Beat it

邦訳：いますぐ走れ それがお前にできる最良の策だろ

血を見たいのか マッチョだなんて気取るんじゃない

だから逃げろ それでもワルになりた
いのか 逃げるんだ 逃げちまえ²⁾

……今夜も喧嘩に繰り出すぜ、と荒ぶるのでなく、争いはよそう、いっそ逃げよう、とい

受付：平成27年9月30日 受理：平成28年1月12日

*近畿大学総合社会学部 教養基礎教育部門・准教授 (中国映画史・中国映画芸術)

1) 本稿は、2015年度カリキュラム改訂後、本学部で開講された共通教養科目「ことばと文化」(中国・アジア篇)の内容の一部を基に、加筆修正したものである。

2) Copy right:Mijac Music, 歌詞邦訳は「「今夜はビートイット」の本当の意味(改訂版)」(<http://maash.jp/archives/1886>、最終確認日：2015年8月24日)を参照の上、修正を行なっている。

う「不戦闘」の歌が“Beat It”だったのだ。後に博愛主義を唱えたり、“We Are The World”プロジェクトを実現したマイケルを考えれば、この歌詞にも「不戦主義」という彼のテーマが貫かれていることが分かる。が、この曲を聴いて懐かしむ世代も、また現代の二十歳前後の若者も、“Beat It”の意味をほぼ「勘違い」しているのではないか。

この「勘違い」を、今度は敢えて地元日本の楽曲に求めてみよう。時代を遡るが、笠置シズ子の「買物ブギー」はそのテンポの良さに多くのアーティストがカバーを出している。が、この曲に大きな文化誤読が存在していることに、どれほどのリスナーが気付くだろうか。

お客さんあなたは一体何買いまんねん
 そうそうわたしの買物は魚は魚でも オッサン
 鮭の缶詰おまへんか
 (略) ボタンとリボンとポンカンと マッチ
 にサイダーにタバコに仁丹
 (略) チョットオッサン今日は チョット
 オッサンこれなんぼ
 オッサンいますかこれなんぼ オッサンオッ
 サンこれなんぼ
 オッサンなんぼでなんぼがオッサン オッサ
 ン オッサン オッサン オッサン³⁾

大阪弁を用いる圏内で、店の主人に「オッサン」と声を掛けるとすかさず「誰がオッサンやねん」と叱られるのはつとに有名な話である。この「オッサン」には、その人物を自己と関係を持たない他者と捉え、その対象を侮蔑する意

味が含まれる。本来、ここで使われるべき名称は、自己に近い存在を指す「オッチャン」であろう⁴⁾。

本曲は、笠置シズ子の和製ブギーが頂点に達した1949年に創作され⁵⁾、東京松竹映画『ペ子ちゃんとデン助』(1950年、監督：瑞穂春海)の挿入歌にもなった。作曲は著名な服部良一、作詞は「村雨まさを」という聞き慣れない名である。が、実は服部良一自身の筆名だ。大阪市平野区に生まれ育った服部が何故このような初歩的ミスをしたか、というと、恐らくは意図的に行なわれたものである。30年代より上京していた服部は、戦後、一般民衆が抱く敗戦の虚無感を払拭すべく、ジャズから派生したニグロ系ブギーを創作していた。ブギーの躍動感ある反復シャウトをこの曲に運用する際、「オッチャン」の“cha”ではなく、「オッサン」の“sa”の方が音感がシャープだと考えたのだろう⁶⁾。服部良一は、大阪人の気質を芯に持ちながら、東京で疾駆しはじめた新しき音楽創出を眼前にした時、大阪庶民の文化表象を脇に置いたのである。このように、東京と大阪の間にも“異”なる文化が存在し、見えない引力と反発力を持ち続けている。

このように、極々身近なところに「勘違い」したままの「異文化」が存在している事実気付くことが肝要だと私は考える。卑近なものからアプローチする手法で、隣国でありながら心は遠く離れてしまっている「中国」という国を見つめ、日本人ゆえに「勘違い」をしていることへの「気付き」を促してみたい。その「勘違い」を僅かでも是正できた時、我々は中国とい

3) 日本コロムビア、楽曲番号 A822B。この歌詞表記は1949年発表当時のものに従っている。なお、当該歌詞には所謂「差別用語」が含まれるため、改変が数回行なわれて現在に至っていることを指摘しておく。

4) 例えば、漫画『ジャリン子チエ』(はるき悦巳、1978-1997年、双葉社)では、原作者自身の出身地である西成区を舞台とし、下町情緒が登場人物の台詞回しで表現されている。作中では「オッサン」と「オッチャン」の慣例的な使い分けが一貫している。

5) 『評伝 服部良一：日本ジャズ&ポップス史』(菊池清麿、彩流社、2013年)、p.195~197 参照。

6) 笠置シズ子を起用した和製ブギーの黎明と流行については上掲書『評伝 服部良一：日本ジャズ&ポップス史』に詳しい。「オッサン」の運用については本歌曲を聴いた上での筆者の私見であり、上掲書に係る記述は存在しない。『ペ子ちゃんとデン助』中の当該映像 (<https://www.youtube.com/watch?v=tBTgCBTNjw0>、最終確認日：2015年8月24日)を観る限り、笠置演じる女性が店主を軽くあしらう姿から「軽視」=「オッサン」という見方も不可能ではないが、フィルムより楽曲の方が先に完成している点から論拠になり難いと判断する。

う「異文化」に違った視線を向けられるのではないだろうか。

2. 学修>学習?

——孔子のことばに耳を傾ける

目下、我々大学教員に求められているものの一つとして、担当授業の中で学生諸君に何を学び取らせるかという「学修」目標設定がある。文字面から見れば、「学」を「修」める、即ち何かを学び、学んだ者の身に益するものとする、という意味が込められていよう。現代の教育学上でも、この「学修」が一般に使用される「学習」より高次のものと認知されている模様である⁷⁾。しかし、果たしてそうなのか。ここで本来の「学修」と「学習」の意味を再度振り返ってみたい。

小学館『日本国語大辞典第二版』⁸⁾には以下に各々の単語が解説されている。

【学修】 勉強して学問を身につけること。修学。

【学習】 ①学びならうこと。学校などで勉強すること。

このように並べれば、「学修」が「学習」に較べ高いレベルの学び方であるように感じられる。ここで、『論語』学而篇第一に記録されている孔子の余りにも有名な教を振り返ってみよう。そこには「学習」の原義が遺されている。

學而時習之 不亦説乎

學びて時に之を習ふ、また説よろこばしからずや
有朋自遠方來 不亦樂乎

朋有り遠方より來たる、また樂しからずや
人不知而不愠 不亦君子乎

人知らずして愠いらず、また君子ならずや

この第一文を改めて読むとき、ある疑問に突き当たるだろう。「学んでその時々^いにそれを習うことは、とても喜ばしいことではないか。」「学」と「習」には明らかな意味の相違があることが、ここに示されている。ならば、その相違とは何なのか。

【學】 まなぶ。ならふ。〔論語集注〕學之為言、効也（「学」の意味とは、倣うこと）。

【習】 繰り返し行ふ。復習する。通曉する。熟達する。〔戰國策、秦策五〕不習於誦（習うことなく、暗誦していた）。〔注〕習、曉也（「習」とは、明確に悟ること）。⁹⁾

「学」の原義は朱熹『論語集注』にもあるように「効=倣う、真似る」である。「まなぶ」の音が「まねぶ」からきていると考えれば判り易いだろう。「学ぶ」とは、教師に教えられたものを真似ることから始まる。外国語習得の初期段階などを例に挙げれば、まさにそのものである。それに対し、「習」は「学」んだ内容を反復することによって、その「学」に通曉、熟達する、即ちその「学」を自らのものにする、という意味をはらむ。また、この「習」は雛が翼を動かして飛ぶ練習をするさまをも示す¹⁰⁾。「先生から教わり、真似た学問を何度も自らの中で反芻し、それを自らのものにして羽ばたく。それはなんと喜ばしいことではないか」。孔子が示した「学習」ということばには、将来に対して大きく開かれた希望が託されている。

それに対し「修」は、

【修】 をさめる。をさまる。ととのへる。と

7) 文部科学省大臣官房文教施設企画部編『国立大学等キャンパス計画指針』（2013年9月）によれば、「学修」の定義を「大学設置基準上、大学での学びは「学修」としている。これは、大学での学びの本質は、講義、演習、実験、実習、実技等の授業時間とともに、授業のための事前の準備、事後の展開などの主体的な学びに要する時間を内在した「単位制」により形成されていることによる」と記す。また、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法を「能動的学修」と称し、「学習」との差別化をはかっている。

8) 2008年、日本国語大辞典第二版編集委員会編。

9) 『大漢和辞典』（諸橋轍次、1968年縮写版第二刷、大修館書店）巻三、巻九の当該項目を基に概説したもの。

10) 同上巻九「習」項目において、「〔説文解字〕習、數飛也（習うとは、頻りに飛ぶこと）」とある。

とのふ。〔廣雅、釋詁三〕修、治也
（「修」とは、調整すること）。¹¹⁾

……が第一義として挙がっており、大きく広がっていくものと逆のイメージ、即ち「収束、整理」を想起させる。「学」んだものをその形態のまま自己の中に「修」めるのが「学修」であり、上掲の「勉強して学問を身につけること」の語義とも齟齬が起こらない。現代日本が求める「学修」には、「学習」が持つ広大な可能性が示唆されていないのである。因みに、「学修」には単一的な語義しかないが、「学習」には二義、三義を読み取ることができる。

【学習】②教育学で、広くは精神、身体の後天的発達をいい、狭くは、過去の経験をもとに新しい知識や技術を習得することをいう。

③心理学で、経験によって、過去の心理的、行動的な経験をこえて新たな行動の仕方を習得すること。¹²⁾

教育学上であれ心理学上であれ、「学習」に託されているのは、過去を超えて生きるための新たな智慧を獲得するという、極めて人間的で前向きな営みなのである。「学修」が「学習」より上位の学びであるという「勘違い」は、遙か紀元前の孔子のことばに耳を傾けることで、明確に理解しておきたいものだ。

3. 贈り物をする事

——日中文化衝突を体験する¹³⁾

この節では、私が学部生の頃に中国で身を以て体験したことを記しておきたい。私にとり、今なお忘れ難い衝撃として脳裏に残る事象であるからだ。私が中国長期留学をすべく北京に赴いたのが1990年の4月初頭のことである。この頃の北京は昨89年に起きた「第二次天安門事件」の傷跡をまだ癒やせずじやない。私が留学先とした中国人民大学の正門前の地面には、人民解放軍の装甲車が回頭した時のキャタピラ痕

が生々しく刻まれており、南北を通り抜ける海淀路には、ライフル銃の弾を二、三発喰らった連結バスが修繕もされずに走っていた。「お前、去年何が起きたか知ってんだろ？ じゃあ何でこんな所に來たがるのさ？ この間抜け」と、人民大学まで送り届けてくれた非公認タクシーの添乗員の男は私の降車際に呟いた。人心が荒んでいることを、直感で察知したものだ。

確かに私は「間抜け」だったのかもしれない。それは天安門事件後一年も経たずに北京入りしたことではなく、4月に留学開始を試みたことに対してである。各国の大学は新学年度が9月より始まり、後期は3月初旬からとなる。4月からでは入学手続が中途半端となり、留学生事務室が動いてくれない。私は同大学の日本語科の先生の伝手を借り、4月開始の短期班に先ず入れて貰うこととなった。が、このクラスはオーストラリア老人向けに開かれた、1ヶ月程の遊学プログラムであった。しかし、このクラスに参加すれば後に長期クラスへと手続変更させてやる、との留学生事務室の中年女性室長の話信じ、その1ヶ月を辛くも乗り切った。

1ヶ月が過ぎ、私は室長に長期クラスへの変更を申し出たが、“研究研究再説（よく検討してから改めて話そう）”と言葉を濁す。不安を抱えていた私のところに、そのうち頻繁に「事務室に來い」と連絡が入るようになる。室長の話では、私のクラス変更はあくまで正規の学期が始まる9月以降の話であり、5月過ぎの現在では長期クラスへ移動させることはできない。よって今年の9月まで帰国せよ、だそうだ。4月頭に北京に乗り込んできて、5月に追い返されたのでは立場がない。それはできない、大体規約違反ではないかと私は室長に食ってかかった。しかし室長は頑として言い分を曲げない。帰国しなさい、帰国などできるかの応酬を、我々は事務室の中で繰り返した。私には事務側が一体何を考えているのか判らなかつた。本当

11) 同上巻一、当該項目参照。

12) 上掲『日本国語大辞典 第二版』当該項目より。

13) 本節は『異文化理解教育』（近畿大学異文化理解教育研究会編、2009年）掲載の拙稿「私にとっての“異文化”——中国留学時代を思い出して」を基に講義した内容を加筆修正したものである。

に帰国させたいなら、私の宿舍利用権を剥奪すればいい、ならば私は身包み剥がされたが如く、這う這うの体で帰国するだろう。

愈々対応に窮した私は、隣部屋の日本人留学生に方策を訊ねてみた。すると彼は平然とした顔で言う。「そんな簡単やか、賄賂使えばええねん」。耳を疑った。賄賂だと？ モノで室長を買収しろというのか？「大層なことやないねん。すぐその“友誼商場”に売ってる缶に入ったクッキー1箱、持って行ったら大丈夫やで。いやホンマ」。関西出身の彼は気っ風よく笑った。クッキー缶25元、当時のレートで800日本円程度だ。何か腑に落ちないが、今は藁にも縋る思い、と、私は翌日にそのクッキーを買いに行くことにした。

が、その翌日の午前八時半という早さで事務室からお呼びが掛かった。「賄賂」は当然用意できていない。やむなく、私は間食用に取っておいた“鴨梨”三つを手にとった。学校の正門前で露天商が売っている、2元程の梨だ。手持ちのセーム皮で表面を磨くと、見違えるほどに輝きを増した。駄目で元々、丸腰より好かろうと私はその“鴨梨”を手にとり事務室に赴いた。

入室すると、女性室長が厳しい顔で振り向き“座下。”と顎で指示する。このままでは、また帰れ、帰らないの再演となる。私は直ちに口を挟んだ。「その前に聞いて下さい。先日郊外まで自転車遊びに行ったら、鴨梨の名産地を通り掛かりまして、とても美味しそうなのを買って来たのです。事務室の皆さんに差し上げたく、持って参りました。どうぞ受け取って下さい」。……室長との言い合いを繰り返していたお陰か、自分の中国語がかなり流暢になっていることに我ながら驚いた。それよりも吃驚したのが、颯めっ面だった女性室長の顔が忽ち柔和になり、私に着席を促してきたことだ。それも先ほどの投げやりな中国語ではなく、フレンドリーな英語で、である。

“Oh!! Thank you! Please sit down.

…… I'll, help you.”

「そんな簡単やか」——隣の留学生の声が脳裏でこだました。本当に、簡単に事が進んだ。私の長期クラス編入こそ9月までお預けだが、今まで通りこの宿舍に寄宿し、自学自習に励むべし、ということで落ち着いた。強制帰国を免れたわけである。

だが、この安物の「賄賂」で簡単に「墜ちて」しまった室長をどう見るだろうか。日本人の眼からすれば、単に贈り物欲しさに嫌がらせをしていたのでは、と詮索したくなる。まして、それが日本円で100円足らずの梨で事が済む、となると、その人と為りの「安さ」を疑わずにはいられまい。無論、私は室長の采配のお陰で留学生生活を続けられたのであるから、彼女には感謝せねばなるまい。しかし、やはり釈然としない。

暫くするうちに、この考え方があくまで日本的発想であり、中国人の考え方は全く別物であることが分かってきた。ヒントは「贈り物」を意味する中国語単語“礼物”にある。

私が「帰国しない」と意固地になるのに対し、室長が「規則」を楯に「帰国しろ」の一点張りであったのは何故か。それは、一介の留学生たる私が、日常より“老師”と呼ばれている組織の「長」たる人物に対し、同等の目線から齒向かっていったからである。“長幼之序”に厳格な中国では、この態度で何事も進展させることはできない。留学生という「低い立場」に居るのならば室長“老師”に恭順の姿勢を示し、低い目線から室長に「お願い」をすべきなのだ。その際、恭順の姿勢を可視化したものが“礼物”である。これは相手に対して自らの“礼”を示す“物”であり、我々が悪意をもって称する「賄賂」などではない。室長から見れば、それがクッキー缶だろうと安物の梨だろうと関係がない。私という留学生が“礼”を持ってお願いに来た、ということを確認する、いわば中国式通過儀礼だったのである。

日本では贈り物をする時、「つまらないものですが」と相手に渡す。これが日本流の謙遜の

14)『感謝と謝罪——はじめて聞く中国“異文化”の話』(相原茂、2007年、講談社)参照。

文化だ。ならば中国では、「貴方のためにわざわざ精力と金銭を費やし持ってきたのです」と相手に贈り物を手渡す¹⁴⁾。相手に対する贈り物に手を抜くような失礼な真似はしない。まして「つまらない」物を渡すなどもってのほかだ。礼儀の示し方は日中両国で形式こそ類似しているが、それ以上に各々の異質さをわきまえておくべきである。

尤も、中国で横行する贈収賄はこの“礼”の意味合いが拡大解釈、或いは悪用された結果というべきだろう。女性室長が私に言った“研究研究再説”とて、同音の“烟酒酒再説(頼み事があるのなら、酒か煙草か持ってこい)”の隠語として余りにも有名である。

4. 映画にみる中国人の「食」とは¹⁵⁾

日本で一般に使われる諺、「衣食足りて礼節を知る」は実は誤用である。民は毎日着る物があって、毎日食にありつける、即ち自らの生活が安定してこそ礼儀、節度を知るものだ、というこの説話は本来、「倉廩実つれば則ち礼節を知り、衣食足れば則ち栄辱を知る」という、『管子』牧民篇の一節から改作されたものである。元来の意味は「米蔵が一杯になれば民は礼儀節度をわきまえ、衣食が足りた時に自らの社会的地位を知るものだ」となる。ここで判るのは、中国人にとり衣食は同等のものではなく、先ず米蔵が満ちる、即ち「食」の確証を得ることを社会生活の第一と考える、ということだ。“民以食为天(民には食が世の最大事)”と言うほどに、食ることが彼らの一般生活の中でどれ程重要であるかというファクターを、本節では中国映画の中に見える「食」の場面から垣間見てみたい。

1999年、中国共産党文化部が国産映画の水準低下を重く見て、芸術的文芸映画の創出を目指し新進気鋭の映画監督、霍建起に託した作品

が《那山 那人 那狗》(邦題：『山の郵便配達』)である。現代化が進む中国において、湖南省の山奥で背囊を背負い郵便物を一件一件廻って配達する父と、その生業を引き継ぐ息子との感情的疎通を描いた佳作である。しかし、本作の中国国内興業は全く振るわず、中央テレビ局への放映権譲渡で赤字を補填する。その後、本作興行権が日本の興業主に売却されるや、日本では主に高齢の観客層に大いに歓迎され、異例のヒット作となった¹⁶⁾。

日本でこのヒットの理由が、忘却されかけたアジア人固有の父子の情や、険しい山道を一步一步と進みながら郵便配達をするというプリミティヴな奉仕精神への懐旧であることは瞭然だ。この「情」や「懐旧」が、2000年代を機に大きく経済発展を遂げる中国においては逆に色褪せたアナクロニズム、と唾棄された点は否めまい。この日中両国の社会背景をひとまず措き、本作映像を注視するとあることに気づく。何れは主人公の息子の妻となる人物として登場する村娘を、湖南省に居る筈のない北方顔の女優が演じているのもさることながら、重い背囊を負って三日歩き続ける父と息子が、水以外殆ど食べ物に口にする場面がないことに、強い違和感を覚えるのだ。必ずと言ってよいほど「食」の場面を盛り込む中国映画では異例の事態である。父子が結婚式に招待され、豪華な食事を振る舞われた際、父が泥酔して昔の夢を見る場面においても、実際に酒を呑んだり、食事に箸を進める行為は描かれない。私が本作を初めて鑑賞した時、えも言えぬ味気無さを感じたものだが、彼らが険しい山中を往くための身体的活力源＝「食」する描写が一切ないからなのだ。これでは「味気」などある筈がない。中国観衆がこの作品に関心を向けなかったのは、経済発展が軌道に乗り、相応の財産を手に入れられるようになった都会人が想像上でパッケージ

15) 本節は拙稿「中国映画の“食べる行為”——講義実践記録——」(『中国文化研究』第23号、天理大学国際文化学部編、2007年)を基に、中国映画監督霍建起作品に話題を絞り、大幅に改編したものである。

16) 当該作は中国国内では“最佳故事片獎”、モントリオール国際映画祭では「観客特選作品」に評されるものの、国内興業的には失敗し、日本興行側に8万ドルで本作上映権を売却するが、公開五ヶ月で300万ドル、総計800万ドルの売り上げを得た。中国での総収入は日本総収入の20分の1であった。聞録『《那山 那人 那狗》熱映日本』(『中国電影市場』2001年第12期、中国電影集团公司出版)参照。

した「農村」の空虚さを、本作に露見させたからではないか。「食」さなければ、人は前に進めない。それは、南方娘を北方の女優に演じさせて郷村に「美」を添加するよりも遥かに、中国の観客に「虚偽」を感じさせたであろう。一方、日本の観客は「食べる」行為が直接映し出されないことに概して違和感を持たない。中国映画における「食」のショット数と、日本映画のそれとを比較すれば、その慣習が明確になるうというものである。

本作監督の霍建起はその後、ノーベル文学賞作家莫言の原作をモチーフに、第二作《暖》(2003年、邦題：『故郷の香り』)を創作する。北京の公務員となった青年、井河が故郷に戻った時、嘗ての恋人、暖が村一番の嫌われ者(この男は香川照之が演じている)と結婚していたことを知り驚く。井河は暖の一家に招待され、ささやかな食事会が開かれる。貧しい暮らし向きの暖も、高価な卵を使った料理を井河のために振る舞うのだ。そして暖は、「直箸」で料理を井河によそってやる。自分が使った箸で料理を取り分ける行為は、潔癖な日本人、とりわけ若者にとっては耐え難い行為に見える。取り分けるなら逆箸か菜箸を使うべきだ、との反感が多く寄せられるところだ。だが、中国人にとってこれが客人に対する歓待の仕方であり、何より愛情表現でもあることを、日本人は認知すべきである。それを、霍建起は第二作で丁寧に描き込んでいるのだ。『山の郵便配達』で「食」という伝統に背を向けていた彼は、自らの作品に中国の「食」を復権させたのである。

因みに、霍建起監督の《情人結》(2008年、邦題：『初恋の思い出』)では、中国人にとっての「食」のありかたこそが作品の中心点に据えられる。恋人同士の青年・侯嘉と少女・屈然は、互いの家の確執から、結婚が許されない。その理由が明かされず納得のいかない屈然は、

父親から本当の理由が知らされるまで、食卓を共にしないという抵抗が出る。時代設定は1980年代中盤とされているが、この時代において共に同じ屋根の下で暮らす家族は、三食つねに顔を合わせて食事をするのが慣例であり、一家安寧の証となる。が、彼女は自分の皿と碗だけ持って、自分の部屋に籠って食べるのだ。人気女優の趙薇演じる屈然の無言の抵抗が、家族を欠いた食卓を暗く沈み込ませ、果ては家庭そのものをも危うくさせる。

「食」するか否か。如何なる作法で「食」するか。「食」がもたらす心理的影響とは何か。中国映画を数作ピックアップするだけで、中国の人たちが重視し、慣習としてきた「食」のあり方が明確に浮かび上がる。それは、我々日本人が既に軽視して久しい「食」への姿勢とは違った、より人の生命の根源に迫り、より人の心情に近い営みなのだ。

5. 名句と「勘違い」——漢詩から得る再認識

高等学校までの国語科教育課程で、漢文が選択科目となってやや久しい。しかし、有名な漢詩から既に日本語化された文言については、譬え年齢が若くとも皆相応に耳にしているものである。例えば、孟浩然の五言絶句「春暁」はその代表格である。

春眠不覺曉	春眠	曉を覺えず
處處聞啼鳥	處處	啼鳥を聞く
夜來風雨聲	夜來	風雨の聲
花落知多少	花落つこと	知んぬ多少ぞ ¹⁷⁾

本詩の序句「春眠、曉を覺えず」とくれば、我々は「春という季節は眠いもの」と捉える節がある。現代語訳すればさしずめ、「春は眠いものだから、日の出の時間など知らずに惰眠を

17) 本詩の訓読については、『漢詩大系』第七卷『唐詩選(下)』(齊藤响、1965年、集英社)所収のものに基づいている。

18) 上掲書においても、現代語訳は「春は睡むたいもの」とされ、前野直彬注解の『唐詩選』(全三冊本、1983年、岩波書店)でも「春の眠りの心地良さ」と訳されている。しかし、『自然への讃歌—心象紀行—漢詩の情景①』(松浦友久編・解説、田口暢穂著、1990年、東方書店)は本詩を解説して「作者が徒に眠りをむさぼってはいない」と述べ、四季を感得する意識がすでに動き出している点を指摘している。

貪ってしまう」といったところだ。だが、これを詠んだ孟浩然是果たして寝坊をしていたのだろうか¹⁸⁾。

少し客観的にこの詩を眺めれば、それが「勘違い」であることに気づくだろう。冬から春への季節推移があれば、当然ながら日の出時間に変化が生じる。卓近な例示をするなら、冬の朝6時に起床してもまだ空は漆黑だが、春の朝6時ならば、既に未明の青色が空を覆い始めている。つまりこの詩は、今まで通り同時間に起床をしているが、もうとっくに日の出の時間を超えている、知らぬ間に世の中は春になっていた、という季節変化への気付きを詠じたものである。この箇所を修正すれば、本詩が「心地良い眠りから覚めればとうに日の出が過ぎてしまっていた。もう春なのか。到るところで鳥が囀っている。そういえば昨晚、初春らしい風雨の音が聞こえていた。風がどれほど季節の花を散らせてしまったろうか、全く、勿体ないことをした」という、視覚聴覚を用いた感慨を一本のストーリーラインで語る風流詩であることが明確になるだろう。

因みにこの詩を詠じた孟浩然是盛唐時代の自然派詩人であり、40歳を過ぎて官吏となる遅咲きの知識人であるが、昇格に必要な科挙試験に合格できず、登用面接会場には酔い潰れた状態で赴き、皇帝の前では世の不平を詠うなど反権力的性格の持ち主であった。結果官職を辞し、余生を江南地方で悠然と過ごしたという経歴を持つ。漢詩とは漢字の羅列による硬質な文学に見られがちなものだが、往々にして世の趨勢から外れたはぐれ者が興趣をのせて詠じた、例えるなら今でいう“Twitter”上の書き込みのようなものである¹⁹⁾。孟浩然是、春の到来に感じて、一句呟いてみたのだ。「勘違い」を払ってこの句を見れば、彼のアウトサイダーとしての心境を感得できるだろう。

話題は変わるが、2014年にある日本映画が公開された。芸人・劇団ひとりがメガホンを執った『青天の霹靂』である。不遇のマジシャンが「青空を割って光る稲妻」に打たれ、40年前にタイムスリップする、という物語だ。この映画に重要な転機に用いられる「青空」の中を迸る「稲妻」が「青天の霹靂」であり、これが主人公に過去への時間遡行という思わぬ現象をもたらす。このように、「青天の霹靂」とは一般的に、青空の日に突如起きる雷のように突然で思いも寄らぬこと、という諺語として用いられる。

ところが、この「青天の霹靂」の典拠とされる南宋詩人、陸游の五言律詩「四日夜鷄未鳴起作」を見ると、意味が全く異なることが分かる。

放翁病過秋 忽起作醉墨

放翁病みて秋を過ぎ 忽ち起きて酔墨を作す

正如久蟄龍 青天飛霹靂

正に久蟄の龍の如く 青天に霹靂を飛ばす 雖云墮怪奇 要勝常惘然

怪奇に墮すと云ふと雖も 要は常の惘然に勝へたり

一朝此翁死 千金求不得

一朝此の翁死すれば 千金求むるも得ず²⁰⁾

この詩を現代語訳すれば、以下のようである。「放翁（陸游自身のこと）は病に伏して秋を過ぎてしまったが、ある日の未明、いきなり起き上がり酔ったような乱れた文章を書き始めた。その姿はまさに、長い眠りから醒めた龍のように、青天に稲妻を走らせた。その文章が奇怪なものだとしても、何も言わず静観して貰いたい。朝が明け、この老体が潰えてしまえば、たとえ千金を積まれても、我が詩は二度と得られなくなるのだから。」

19) この観点は、講義後に提出を求める「ミニツペーパー」に、ある学生が指摘したものに拠る。

20) 本詩は『陸游』（中国詩人選集二集8、一海知義注、1962年、岩波書店）、『漢詩大系』第十九卷『陸游』（前野直彬、1964年、集英社）、『陸游詩選』（一海知義編、2007年、岩波文庫）に収められていないため、訓読については「Web 漢文大系」の「青天の霹靂」項目などを参照した。<http://kanbun.info/koji/seitenheki.html>、最終確認日：2015年8月24日。

ここに描かれているのは、身体を病んだ陸游が残された渾身の力で詩文をものする様子と、そこに生じた陸游自身の感慨である。さてくだんの「青天の霹靂」の典故は、上掲の現代語訳の下線部にある。長く眠りにあった龍が覚醒して紺碧の空を走るように、陸游自身の最期の一筆に賭ける魂の猛りが稲妻のように飛ぶさまこそが、「青天の霹靂」なのだ。我々が慣用語として使う受動的かつ自然的な意味とは全く異なり、「青天の霹靂」とは元来、生死を賭したある男の能動的所作により起こる、超自然的現象を言うのである。

そもそも、我々は「急で意外なこと」を「青天の霹靂」ではなく「晴天の霹靂」と書いていないか。中国にもその表記があるので明らかな「誤用」とは言えないが、あくまで副次的な表現である。では、「青天」と「晴天」とに如何なる違いがあるのかというと、「晴」はスカイブルー、ライトブルーといった文字通り「晴れ」の色彩を意味する。我々の常用する諺の意味に合わせるなら、この「晴天」が相応しい。が、「青天」となると色彩濃度が異なってくる。陸游は本詩に題して「夜鶏未鳴起作」=まだ鶏が鳴かない未明の時間に書いた、とある。この「青」は、夜の空に近い青、即ち「藍」「群青」のような極めて濃いブルーなのだ。そこに陸游の魂が稲妻となって奔る。それだけに閃光の走る残像が強烈なコントラストを成して網膜に残る。故に、その光跡が龍に例えられる。背景の色彩がスカイブルーでは、相応しいコントラストを得ることはできない。

「青天の霹靂」は既に原典から離れ、慣用の

部類に属する²¹⁾。しかしその原典から、閃光に姿を変えて紺碧の空を翔る人の魂が描かれているという、中国ならではのダイナミクスを知れば、我々が日頃口にしている「ことば」が持つ、本来の深遠さを感じてできるであろう。

さて、上述の 陸游も「醉墨を作す」と言ったように、漢詩に酒はつきものである。盛唐の「詩仙」と称される李白も、「會須一飲三百杯（必ず一度に三百杯は飲もう）」と「將進酒」詩に記し、大いに飲酒の快楽を謳った。一方、別離の酒もある。于武陵の絶句「勸酒」はその代表格として日本人に多く知られている。

勸君金屈卮 君に勸む 金屈卮^{さんくつし}
 満酌不須辭 満酌 辭するを須ひず^{もち}
 花發多風雨 花發いて 風雨多し^{ひら}
 人生足別離 人生 別離足る²²⁾

この詩は、井伏鱒二により和訳されてつとに有名となった。「コノサカヅキヲ受ケテオクレドウヅナミナミツガシテオクレ ハナニアラシノタトヘモアルゾ “サヨナラ” ダケガ人生ダ」。とりわけ最終二句は、人生の無常観を詠じて、ペシミスティックな日本人に愛好される文言だ。が、果たして「サヨナラダケガ人生」という悲観のみを、于武陵は詠んでいるのだろうか。

近刊書『漢詩醉談 酒を語り、詩に酔う』²³⁾は大学教授同士が対談する形で、漢詩の魅力を平易かつ愉快に語った好著である。本書の最後に紹介されるのがこの「勸酒」であり、井伏訳の最終句だけが「一人歩き」し、ペシミズムば

21) 諸橋『大漢和辭典』（前掲）卷十二には、陸游が本詩で描いた「筆勢の躍動する形容」を第一義に置きつつ、第二義として「突発の出来事」と記している。

22) 本詩の訓読については、『漢詩大系』第七卷『唐詩選（下）』（齊藤响、1965年、集英社）所収のものに基づいている。尚、前野版『唐詩選』（前出）は後半二句を「花發ひらけば風雨多く 人生別離おと足し」と読んで併列句としているが、本論では最も伝統的な終止形訓読を採った。訓読の差異による本詩の鑑賞変化については、芥川敏子「井伏鱒二『厄除け詩集』の「勸酒」について」（文学教育研究者集団編集『文学と教育』166、1994年）に詳しい。

23) 申田久治、諸田龍美、2015年、大修館書店。

24) 『中華飲酒詩選』（青木正兒、筑摩叢書31、1964年、筑摩書房）の本詩解説に「花には嵐、人には別れ。ままにならぬが浮世の習ひ。せめて相逢うた時に歡を盡せよ」とある。これは文政六（1823年）の『唐詩選和訓』（李攀竜編選、嵩山房高英和訓、嵩山房）の「別れるハ人生の常、（略）こう逢てこの々むはまれな、まづ酒でも飲でたのしむがよいと考むるなり」を継承するものであり、「中国的快樂主義」の解釈が伝統性を有することが判る。

かりが先行している点に異論を唱える。そして、于武陵の詩は、人生には別離はつきもの、だからこそ君と出会えた今を楽しむ、という逆説的表現を用いているのであり、これこそが「中国人的快樂主義」だ、と解説する²⁴⁾。この指摘から、我々日本人が本詩、否、井伏詠の詩を通して読む時、酌み交わす杯が“金屈卮”^{きんくつし}、即ち把手付きのマグ式大盃であることを看過していることに気付く。マグに満たされた酒を大胆に呑みほしては相手のマグにも並々と酒を注ぐ。日本人が好んで想像する別離の泪酒の風景とは程遠く、今この時を君と共に呑みたい、と酔い痴れる詩人の愉樂の有様ととれば、そこに現代中国のありようさえもダブルイメージできるだろう——刹那的ではあるが、今を快樂として生きる中国の都会人の姿と、もう会えなくなるかもしれない呑み仲間に“金屈卮”を突き出す于武陵の姿とが。「中国人的快樂主義」は、遠く時代を超えて今なお生き続けている。

6. 結語にかえて：「これからどうするか」

——中国人の思考

大気汚染、環境破壊、マナーの悪さ、爆買、パクリ大国……。 「中国の良い点、悪い点を各々三つ挙げよ」との質問に、学生たちは正直に「悪い面ばかりが思い浮かび、良い面を探し出すのが困難だった」として、上記のマイナス面を逸早く提示する²⁵⁾。2010年の尖閣諸島沖漁船衝突事件以来、各種メディアによる中国批判は若者たちに嫌中意識を刷り込み、その影響は今も強く残っている。学生たちが挙げた中国のマイナス面を全否定しようとは、私は全く思わない。それは厳然たる事実だからである。ただ、それを執拗に責める日本の報道によって過剰に増大した嫌中意識は、中国という国の懐の広さや奥深さを理解する上での障碍となると

私は見なす。それゆえ私は、古典文学や実際の体験談、映画媒体などを用いて中国人の思考形態、文化慣習、古えからの教養を紹介し、学生たちの中国観をできる限り「原寸大」なものにしようと努めた。例えば、上記の「パクリ」の話題について、学生たちは講義後、「大胆に技術を模倣する勇気を、本当は“異文化”と捉えるべきだ」とみなす学生も居れば、「やはりパクリは許せない」と強く批判しつつ、「そういった中国の悪い面も知る必要がある」と語る学生も居る。如何に中国を見るか、私が中国という「異文化」への見解をどのように提示しようとも、その受け取り方は個々の学生に委ねられている。しかし、本論に挙げた各節に通底する「勘違い」というものが中国如何に問わず、常に我々の認識の中に在ることに気付いておきたい、と強く願うものである。

本論をむすぶにあたり、中国人のある思考形態について触れておきたい。先に述べたように、現代中国都市生活は、いつまで続くか確証の無い快樂主義を、確証無きがゆえに刹那的に享受している。しかし一方、中国政府は常にこれより先に「益するか否か」を見据えている。日本総研理事であり首席研究員である呉軍華は尖閣諸島の問題を、日中関係が良くなればビジネスでも有利に働き、国益をもたらすという現実的戦略に日本政府が疎かったから、と論難する²⁶⁾。また、一時国際コラムニストとして脚光を浴びた加藤嘉一は、尖閣問題に対して「起こってしまったものは仕方ない、問題はそこから何を得るかだ。そのためにどういう戦略を描き、どう行動するかだ、という残酷なまでにしたたかな姿勢を貫いた」中国人の思考回路を特記している²⁷⁾。思えば、かの周恩来も日中国交正常化の過程で“前事不忘、後事之師（過去は忘れることなく、今後の戒めとする）”と述べ、

25) 中国に対するマイナス面が具体的事象で示される一方、プラス面については、国土が大きい、中華料理が美味しい、パンダが可愛いなど、凡庸で抽象的な回答にとどまる傾向にあった。

26) 呉軍華「日本は尖閣問題を教訓にして、不確実性に悩む中国の“もう1つの顔”を理解せよ」ダイヤモンド・オンライン 2010年10月13日、<http://diamond.jp/articles/-/9698>、最終確認日：2015年9月6日。

27) 加藤嘉一「日中問題は全国民にとっての“世紀の宿題”、“尖閣危機”から日本人が学ぶべき4つの教訓」ダイヤモンド・オンライン 2010年10月2日、<http://diamond.jp/articles/-/42451>、最終確認日：2015年9月6日。

中国市場経済の祖である鄧小平も“大胆嘗試、有錯改回来（大胆に試みよ、過ち有れば直ちに修正せよ）”と“改革・開放”政策を打ち出した。そこには前向きな、「功利的樂觀主義」というものが通底していると言えよう。

「アベノミクス」というタームが、その経済効果を明瞭にできぬうちに「安保法案」採決の陰に隠れ、殆ど忘却されてしまう現状の日本は、今後中国との経済提携なくして存続することが難しくなるだろう。今後、日中関係を「共に益するもの」に転化するか否かは、いま、大学生である若者たちの双肩にかかる大命題と言える。その大命題に取り組む前に、負のイメージの払拭のみならず、もう一つ奥側に潜む中国固有の文化、我々にとっての“異”なる文化に自ら手を伸ばし触れようとする胆力が、彼らに試されているものと私は考える。